

# 都市における趣味の養蜂の可能性

春井 勝

今日では開発による蜜源植物の減少、後継者不足等によって、プロの養蜂家による転地養蜂が困難になってきている。

他面、都市部においては「自然回帰」が叫ばれ、ミツバチを家庭で飼育して、少しでも自然に親しもうとし、自家製のハチミツを採取して賞味するアマチュアの養蜂家による「庭先養蜂」が少しずつではあるが増加している。

筆者は大阪・兵庫の府県境に位置する池田市(大阪府)に在住している。池田市は大阪市の中心部から約15km北西方向にある人口10万人

の衛星都市である(図1)。約30年前までは市南部の丘陵地にもミカンが栽培されており、現在も数haのミカン園が残っている。

筆者は趣味の養蜂をはじめて10年になるが、市街地での最近5年間の採蜜量について報告するとともに、都市部でのアマチュアによる養蜂の可能性を検討する。

## I 材料および方法

### 1. 材料

#### (1) 供試品種

チョーク病に強いといわれているセイヨウミツバチのカーニオラン種 (*Apis mellifera carnica*) の種バチを神戸市の俵養蜂場より導入し、その後、自然交配させたものを供試した。

#### (2) 女王の更新

女王は採蜜期終了時に1年ごとに更新した。

#### (3) おもな管理

ミツバチヘギイタダニの駆除にはアピスタンおよびダニコローパーを使用した。また、流蜜期には継箱(1段)を利用した。

### 2. 方法

(1) 市街地の住宅の庭先に巣箱を1群設置し、5年間(1990~1994年)の採蜜量の推移を調べた(図2)。

#### (2) 採蜜方法

4月から7月にかけて巢内の貯蜜状態を確認しながら行った。流蜜期は7~10日間隔で採蜜した(本来ならば天候等を考慮して最低10日間隔にすべきであるが、勤務の都合で、週末しか時間がとれなかった。しかし、採取したハチミツは、長期間(約6カ月)保存しても発酵することもなく、品質は保たれたと思われる)。

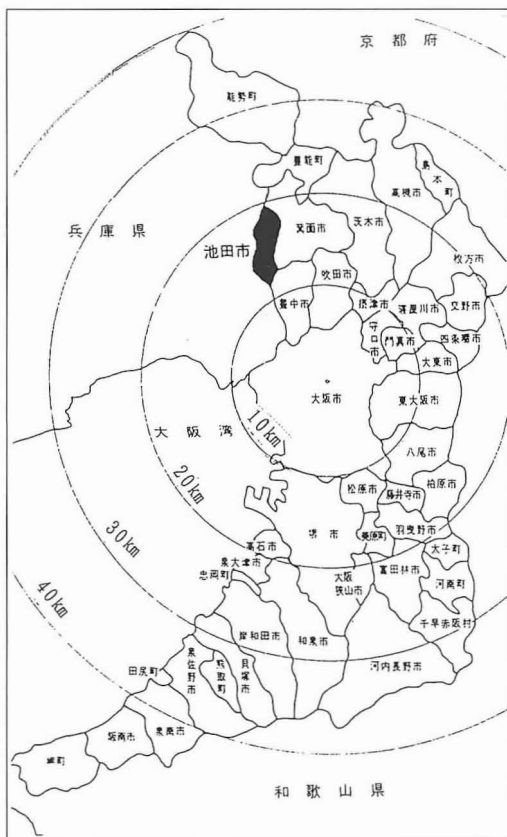


図1 池田市の位置



図2 庭先の巣箱

## II 結果

5年間の採蜜結果は以下のとおりである (図3, 4).

### 1年目 (1990年)

前年の夏から秋にかけてダニ駆除を徹底したので冬季の蜂数の減少が少なく、健勢もはかどおり、4月上旬からの採蜜が可能となった。また、毎回の採蜜量の変化が少なかった。6月17日まで採蜜できた (通算採蜜量 31l)。

### 2年目 (1991年)

4月下旬から採蜜できた。毎回の採蜜量はあまり変化がなかったが、6月上旬にやや採蜜量が増加した (通算採蜜量 31.5l)。

### 3年目 (1992年)

4月中旬から5月中旬にかけて採蜜量は1~2lと少なかった。これは前年秋にミツバチヘギイタダニが発生し、その対策が遅れ、蜂数が減

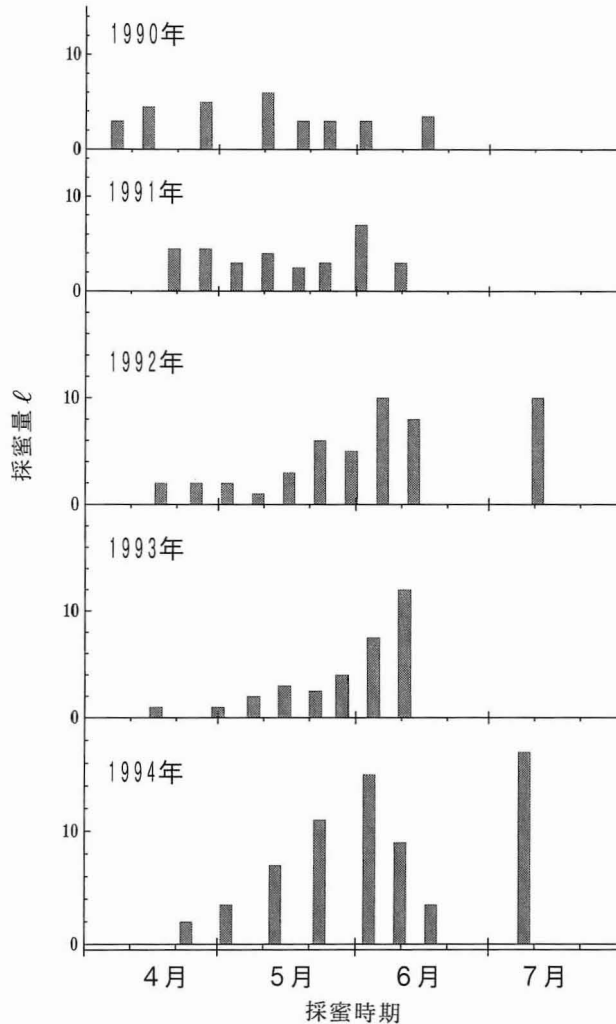


図3 1群当たりの採蜜量の推移 (1990~1994年)

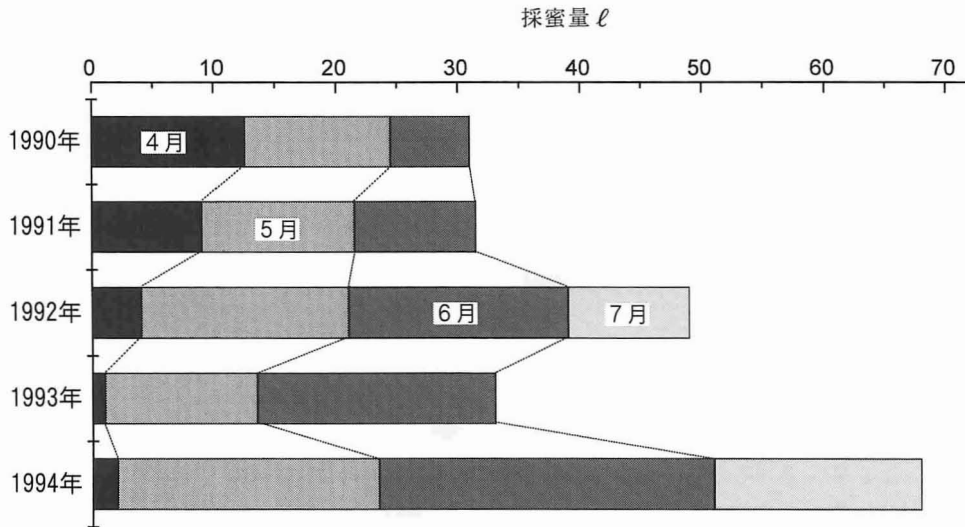


図4 1群当たりの採蜜量の年次変化 (1990~1994年)

少し、春の建勢が遅れたことも影響したと思われる。しかし、5月下旬から6月にかけて、採蜜量は増加し、7月12日まで採蜜できた(通算採蜜量49l)。

#### 4年目(1993年)

4月から5月にかけて低温が続き、建勢が非常に遅れた。しかし、5月下旬から6月にかけて採蜜量が増加した。この年は冷夏と長雨だったが、採蜜期には雨による障害はなかった(通算採蜜量33l)。

#### 5年目(1994年)

前年の秋にミツバチヘギイタダニが発生し、蜂数が減少し、春の建勢が非常に遅れた。初回の採蜜も5年間でいちばん遅く(4月24日)、採蜜量も2lと少なかった。しかし、その後、降雨も少なく、天候にも恵まれ、採蜜量が増加していった。また、カラ梅雨のため、6月下旬から7月上旬にかけて集蜜が多く、1回では最多の17l(7月9日)を記録した(通算採蜜量68l)。

5年間を通して、採蜜期終了後の7~8月も流蜜があり、女王の更新も容易であった。9~11月にかけてオオスズメバチの飛来もほとんどなかった。ただ、キイロスズメバチが若干飛来するので、スズメバチ捕獲器は設置した。

### III 考察

はじめの2年間(1990, 1991)は蜂数の増加に合わせて、空の巣板を巣箱内の巣板の外側へ入れ、ハチミツの採取を優先する管理をしていた。しかし、3年目以降、周辺の蜜源植物の種類が把握できるようになり(図5)、4月までは空の巣板を巣箱内の巣板の内側へ入れ、蜂数を増加させ(ミツバチヘギイタダニの影響もあったが)、5月中旬からの採蜜量の増加が図れるような管理に変更した(当地では、4月下旬までは色が濃く香りも強いサクラや、結晶しやすいナタネのハチミツが採取できるが、5月中旬になるとニセアカシア(図6)やミカン(図7)などの良質のハチミツが採取できることがわかったため)。ニセアカシア、ミカンについては年によっては純粋に近いハチミツが採取できた。

1990~1994年の5年間で31l~68lと幅があるが、採蜜量としては最低30lは確保できることがわかった。よく、1群あたり1斗缶1本(約18l)採蜜できればよいといわれているが、それをはるかに越えている。

### IV 都市における庭先養蜂

休日を利用する趣味の庭先養蜂では、流蜜期

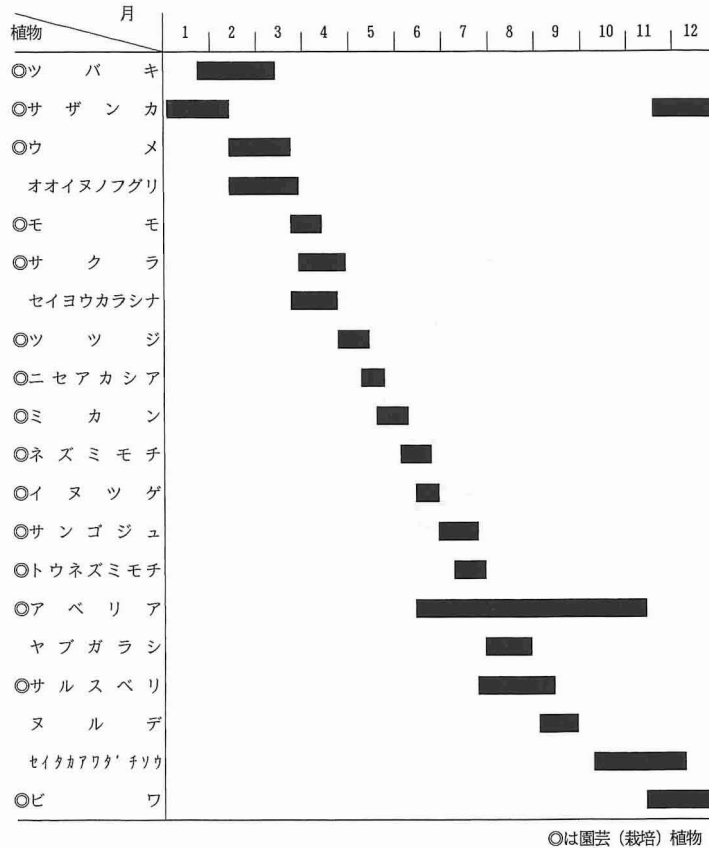


図5 池田市における主な蜜源植物と開花期

には通常、週末に採蜜作業が集中するため、採蜜間隔が7~10日前後となってしまふ。しかし、ハチミツは長期間(約6カ月)経過しても発酵するようなことはなく、自家消費するにあたっては品質的にも問題はないと思われる。

プロの管理による転地養蜂では、九州や四国の暖地で早春から建勢にかかり、4月にはレンゲやナタネの採蜜を行う。一方、庭先で定地養蜂を行う場合は、その周辺の蜜源植物の種類に影響される。建勢の時期は遅くなくても、周辺の蜜源植物の種類と流蜜期を把握すればそれなりに良質のハチミツを採取することができると思われる。

市街地では蜜源植物の種類が多いため、単一の花の「純粋ハチミツ」を採取するのは非常にむずかしい。ほとんどが「百花蜜」と称する雑蜜になってしまう。しかし、自宅の庭先で採取したハチミツは、そこでしか採れない「産地限定」という付加価値が加味される。また、ミツ

バチを「ハチミツの生産者」という観点だけでなく、「自然回帰のシンボル」や「ペット」としての価値を見出すこともできる。

都市部での蜜源植物は公園の樹木や花壇の花、街路樹、それに民家の庭園樹がある。

一方、農村部では地域景観作物や地力保全作物としてのレンゲが復活してきているが、レンゲ畑が水田になると蜜源が極端に少なくなる場合が多い。それに加え、水稻の害虫防除のための大規模・広範囲にわたる農薬散布によって特に定地養蜂の場合は、蜂群への影響が非常に大きい。その点、市街地では農薬散布による影響は非常に小さく、蜜源もほぼ年間を通じて存在している。また、天敵であるオオスズメバチもほとんど飛来せず、ミツバチの生息する環境としては申し分ないと思われる。

## V 都市養蜂の留意点

都市の中でミツバチを飼うことは趣味の養蜂



図6 街路樹にも使われるニセアカシア

家にとって魅力的なことであるが、いちばん大切なことは周囲の住民の理解を得ることである。筆者の経験もふまえて、次のことに注意する必要がある。

(1)巣箱は外部から直接見えない場所に設置する。

広い庭があれば問題はないが、生垣や塀で囲まれて、外部から直接見えないような場所に設置すると案外、ミツバチがいることさえわからない。

(2)他人が刺れないように注意する。

「ハチは刺す」という印象がいちばん強く、一度刺されると理解を得られなくなることが多い。また、人によって、アレルギー反応が出ることがあるので、むやみに巣箱に人を近づけないことが大事である。なお、2mほどの高さの生垣や塀で囲まれていればまず大丈夫であるが、「何もしなければ、ハチは刺さない」というのを周囲に認識させることも必要である。

(3)分蜂を絶対にさせない。

分蜂時のハチのさわぎが人々の恐怖心をおおひ、まれに警察沙汰になることがあるので、特に注意しなければならない。

①女王蜂の羽を切っておく。

②更新時期でないときの王台は必ず除去する。

③王台を多数作るなど分蜂の兆しが現れたら、あらかじめ2群に分割するなどして分蜂熱をおさえる。

④1週間に1回は内検する(10日以上間隔が開いてしまうと、王台を見落としていた場合、分蜂するおそれがある)。

(4)周辺の住民に採取したハチミツを少しでも配っておく(周辺の人々がミツバチを飼っていることを知っている場合、少しでも配っておくと意外と寛容になる。表現は良くないが、「甘い汁を吸わせておく」ことも大事である)。

これらのことを念頭において周辺の人々とコミュニケーションをはかっていくとかえって、ミツバチの良き理解者になってくれる場合がある。筆者の場合、ウメやモモ、キウイなどの家庭果樹がよく実るようになったと逆に喜ばれることもあった(図8)。

## VI 都市養蜂の新しい展開

市街地で養蜂を行う場合、巣箱を置く場所さえあれば近くに蜜源植物がなくても問題は無い。ミツバチの行動半径は少なくとも2kmはあるので、活動面積は、

$$2 \text{ km} \times 2 \text{ km} \times 3.14 = 12.56 \text{ km}^2 \\ = 1,256 \text{ ha}$$

となる。この面積の中で蜜源植物があれば十分可能である。

しかし、さらに一歩進んで、新しい養蜂ビジネスを提案したい。

この物余り時代のなかで本物志向の傾向はますます強くなってきている。ハチミツの販売もこの考え方を取り入れてみたい。

例えば、上場企業の代表者や役員は住宅街に広い住居を持ち、交際範囲も広い人が多いと思われる。それに、中元や歳暮などの贈答品にか



図7 ミカンの花を訪れるセイヨウミツバチ



図8 筆者の蜂場のひとつ

ける費用も相当なものと思われる。しかし、品物は結構ありふれた物になりがちである。そこで自宅で採れた自家製のハチミツを贈答用に利用してもらうのであるが、実際にミツバチを飼育するのは彼らではなく、養蜂業者が管理を請負うのである。

依頼主の庭先に巣箱を設置して目の前で採蜜する。採取したハチミツはすべてその家のものとする。そのかわり、巣箱の管理料を受取るというシステムである。ただし、保障採蜜量（最低でもこれだけのハチミツが採れる…例えば18l）は決めておく必要がある。「世界でここだけでしか採れない自家製ハチミツ」という付加価値がつくので、管理料は同量のハチミツの販売額の数倍程度でも可能だと思う。何人か顧客を持てば、ビジネスとしての展開も夢ではないと思われる。

ほとんどの人は養蜂と聞いて思い浮かべる風景はレンゲ畑に巣箱がたくさん並んでいる田園地帯であり、花とともに移動する養蜂家である。都市養蜂はそういった絵にはならない「ゲリラ養蜂」である。しかし、やろうと思えば誰でもできる趣味の養蜂である。今後のわが国の養蜂はプロの養蜂と、趣味として文化的要素の強いアマチュア養蜂の2つに分化していくと思われる。 (〒563 池田市満寿美町11-3)

#### 参考文献

- 井上丹治. 1982. 養蜂のスタート. 養蜂研究所出版局 pp. 59.  
 俵孝. 1985. ミツバチチョークブルード病の防除について. 第30回国際養蜂会議発表論文 pp. 12.  
 渡辺寛・渡辺孝. 1984. 近代養蜂. 日本養蜂振興会. pp. 726.

MASARU HARUI. Possibility of hobby beekeeping in urban area. *Honeybee Science* (1995) 16 (3): 113-118. 11-3, Masumi-cho, Ikeda-shi, Osaka, 563 Japan.

While the professional beekeeping is declining gradually because of decrease in honey sources and successors, the potential of hobby beekeeping among urbanites is rising with the rise of naturalism as the background, in which they are keen to get close to the nature.

For years, the author has located colonies in his garden, only 15 km from the heart of Osaka, the second largest city of Japan, and recorded the colonies' activity. Honey was harvested for several times between April and July every year and the total yield reached 31 to 68 l per year. The figure is much better than the recent general standard per colony (18 l). Such a good harvest was brought about from some orchards and roadside trees such as *Citrus* spp. and *Robinia pseudoacacia*. Further, attacking by giant hornet, which is usually serious problem for *Apis mellifera* beekeeping in Japan, is very few because the land development reduced their habitats, while the urbanization itself has brought various honey plants to keep residential environment. All these circumstances favor to keep bee colonies all year round even inside a city.

New business potential for professional beekeepers that is to manage the bees for such hobbyists like gardeners who trim hedges for them is proposed.